

た。指揮官の命令のまま行動していた兵隊たちにとっては踏んだり蹴ったりの災難続きで、体の疲労が一段と加わるようであったが、その中で一人尖兵小隊の前原小隊だけはあの洞窟からの敵の襲撃を軽機をもって撃退した功があったので哀案を分ちあった。

また、大隊は坡塘墟の渡河地点に戻り、師団の渡河を援護するため現地付近の民家を占領して宿営に入った。二日半程、飲まず食わずで広東省界の山中を行軍、行軍で歩き通した中隊の兵隊たちにとっては救われたように皆眠った。そして師団の渡河を援護するため渡河地点の警備についていた。第三大隊も師団の渡河が完了するやその任務を解かれ、十月十六日の夕刻連隊の後を追って平南県の平野を行軍して行った。

#### 〔編注〕

大竹清照氏の手記（その一）は、第四巻に掲載されております。

## 戦地で聞いた玉音放送

神奈川県 荒井 優

私は大正八（一九一九）年生まれで、昭和十五（一九四〇）年一月に現役徴集されて独立混成第八旅団通信隊に入隊し、北支、中支を転戦して昭和十八年十一月に満期除隊となりました。しかし、昭和十九年二月に相模原の電信第一連隊に召集され、新しく編成された電信二十八連隊に編入され、同年四月には漢口に移動しました。ここには電信第十三連隊が駐屯していたのですが、湘桂作戦に転進したため、その後を我々が引き継ぐことになりました。

電信二十八連隊では、本部、材料廠、六つの有線中隊、無線隊から編成されていて、本部と無線隊と材料廠を漢口に置き、各線中隊はあちこちに配置されていました。私は波隊と呼ばれた無線隊に配属され、被服係を担当していました。漢口に到着してから一年近

くは移動することはありませんでしたが、二十年二月から四月は老河口作戦に参戦することになりました。

老河口作戦が終わった四月末から七月末の間、私は無線分隊の分隊長に任命され、沙洋鎮で無線所を設営して漢口の本部との無線通信を行う命令を受けました。荒井分隊の隊員は全部で六人であり、七月末には漢口の本隊に戻る予定でしたが、その後に移動の命令もなく、私はこの沙洋鎮で終戦を迎えることになりました。

#### 沙洋鎮

この沙洋鎮の町は漢水のほとりにあり、昔から物資の集散地でした。この交通の便利さのため、日本軍は第十一軍の輸送司令部を設置していて、周りには野戦病院、貨物廠、野戦郵便局、自動車連隊なども駐屯していました。沙洋鎮の小高い丘の上には、第十一軍の輸送司令官の官舎が建っていたのですが、第十一軍の転進により空き家となっていました。丘の上で無線所を設置するには都合が良いことから、この官舎を荒井

分隊が使用することになりました。この官舎は少将が利用していたのですが、純日本風の大きな建物でした。

玄関を中央にして左右に奥まった建物が連なり、コの字形に部屋が配置されていました。右側には厨房、当番室、副官室、兵隊用の風呂などの部屋が並び、左側には居間、司令官用の風呂、司令官室が並んでいました。下側の道路から玄関までは、自動車が軽く通行できる道幅の道路が続いていて、玄関前は広場と築山を設けてあり、道路は玄関前でループ状となっていました。今から考えても、とても立派な建物でした。

荒井分隊は玄関に続く居間に三号甲無線機を設置し、漢口の軍司令部との間で連絡する仕事をする事になりました。私は元の司令官室を自室に使用しましたが、十畳位の床の間付きの部屋でした。我々の駐屯した元司令官の官舎の丘の下には、道路を挟んで反対側に有線通信の電信二十八連隊第六中隊が駐屯していました。第六中隊と漢口の軍司令部との間は有線電話がつながっていて、軍司令部から沙洋鎮の各部隊には

有線で連絡することができるようになっていました。

命令、伝達はこの有線通信が常套に用いられる通信手段であり、有線が切断されて連絡ができなくなる、第六中隊から連絡があり、私の無線小隊が軍司令部と通信するように切り換わっていました。従って、有線通信が機能している時には通信分隊の仕事は無く、単に連絡を取り合っているだけでした。

本来は業務以外に放送を受信してはいけないことになっていたのですが、荒井分隊では無線機を使って各種の放送をしょっちゅう聴いていました。短波ではデリー放送、重慶放送は俗にデマ放送と呼んでいて信用しませんでした。中波では漢口放送を聞くことができました。漢口には漢口放送局と呼ばれる無線局があり、日本のNHKから放送された番組を短波で中継して、中波で再放送していました。

我々が番組の内容をメモすると、電信二十八連隊第六中隊の曹長がそのメモを取りに来ていました。曹長は放送内容を謄写版で印刷して、沙洋鎮付近の部隊に配っていたようです。官舎の周りには他の部隊はいな

く、何をしているか誰にも悟られることがなかったのだ、放送は通信隊の皆が交代で、ほとんど毎日聴いていました。

ポツダム宣言については、七月頃から外国放送で何回も聞いており、その概略は承知していました。ただ、ヤルタ会談の情報については知りませんでした。外国からの放送はデマ放送と考えていたので、その内容については深刻には考えていませんでした。また、中国での戦闘では負けたことがなかったので、その内に神風でも吹くだろうと思っていました。原爆については、マッチ箱の大ききで大きな威力がある兵器である、という情報が入っていましたが、どこの放送局から聴いたか忘れませんでした。しかし、かなり早い時期に聴いていました。

八月十四日

十四日昼前に漢口の軍司令部から私を指名して電話があり、「明日昼に陛下の重大放送がある。沙洋鎮の付近に駐屯する全ての部隊の長を集め、陛下の放送を

聞かせよ」と指令がありました。陛下の放送内容に関心があったので、電話をくれた司令部の担当者に「どんな内容ですか？」と聞いたが、「それは分からない。天皇陛下が直接放送するのだから重要な内容ではないか」と返事をもらいました。私は「恐らくしっかり働け、という励ましの放送ではないか」と考え、まさか負ける内容の放送であるとは少しも考えていませんでした。

「とにかく、部隊の人を集めて、陛下の放送を直接聞かせよ」と言われました。それで、荒井分隊の五人が手分けして、沙洋鎮の付近にいた日本の各部隊を全て回り、「明日、陛下の重大放送があるから、無線通信所に来て、放送を聞いてくれ」と伝達しました。

八月十五日

当日は各部隊の代表が四、五十人ほど通信所の前に集合したと思います。自動車連隊の連隊長は来てくれましたが、他の部隊では副官程度の階級の者が集合し、余り階級の高い人は集合しなかったような記憶が

あります。その時にはそれほど重要な放送と考えていなかったようで、一般の兵隊が部隊の代表として参加したところもあったようです。

全員が玄関前に集まりました。どういいうわけか、荒井小隊はスピーカーを持っていたので、三号甲無線機にスピーカーを接続し、そのスピーカーを官舎の居間の窓から車寄せの方に向けておきました。本来は、三号甲無線機はレシーバーを使用して受信するものですが、この時は皆に聞かせるように準備しておきました。

玉音であることを事前に通知してありましたが、放送を聴く者たちの姿勢はバラバラであり、立っている者や植木に座っている者もいました。また、服装もまちまちであり、必ずしも正装していたわけではありませんでした。

玉音放送は漢口にあった放送局によって中継された放送を受信しました。放送は聴き難かったです。第一に、陛下のお声が独特のイントネーションで、難しい言葉遣いのために内容が理解できませんでした。無線

機自体は玉音放送が始まる前に調整しておいたはずなのですが、当日は普段よりも雑音が多かった。あの雑音はどこから出ているものか分かりません。その日以前に漢口放送を聞いた時に比べると雑音は多い気がしました。集まった人達にはどのような内容か、理解することができないような雑音の混じった放送でした。

私も放送の意図はよく分からなかったのですが、放送の中で「ポツダム宣言」の単語を聞き取ることができました。この単語から、それ以前に聴いていた海外放送による「ポツダム宣言」の知識を合わせることで、玉音放送は無条件降伏を知らせる放送ではないかということが分かりました。

放送で敗戦を聴いたとき、私にはそんなに悲壮感はありませんでした。それ以前から海外放送などを通じて、少しずつですが、敗戦に向かっていることを理解していたからです。ただ、これからどんなことになるのかな、とは考えていました。

放送が終わって解散したのですが、集まった人達の

半分位の数の人が戻ってきました。その人達から「これはどんな内容の放送なのか。部隊に戻って、部隊長にこういう内容の放送を聴いてきた、と報告しなければならぬが、これでは全然分からないではないか」と質問されました。さらに「お前たちは前々から番組を聴いているのだから、大体の状況は分かるのではないか。説明しろ」と言われたのです。

私は「今日の放送は私自身もよく分からなかったが、放送の中に『ポツダム宣言』と言う単語があることから『ポツダム宣言を受諾して降伏した』という内容だと思えます」と伝えたのです。

ポツダム宣言とは無条件降伏なのだ、その宣言を受諾したのが今日の陛下の放送なのだ、などと以前からの知識で解説すると、全員が「へー」と驚いて、「えらいことになった」と反応していました。それまで支那派遣軍では中国軍とは負けていなかったの、驚いたのでしょうか。しかし、私の説明を聞いても、そんなに動揺はしていませんでした。私の説明を聞いた人達は、「部隊に戻って、その内容で報告していいか」

と確認してきました。私は「もちろん、報告して構わないよ」と返事しておきました。

八月十五日の午後

この頃、沙洋鎮から七〇キロ位西にある当陽には第一三二師団が駐屯していました。十五日の午後二時半頃に、この第一三二師団の参謀高橋中佐から私に直接電話がかかってきたのです。「お前の部隊では、近くの部隊の連中を呼んで、重慶のデマ放送を聴かせたらしい。お前はとんでもないことをしてくれだ。軍規に違反したので敵罰に処するので、覚悟しておれ」ということなんです。誰かが正午の玉音放送の内容を高橋中佐に連絡したようでした。

電話では「私は、参謀殿を存じ上げていない。私の分隊は第一三二師団の指揮下ではなく、漢口の合同通信所長の指揮下であり、そちらに連絡して下さい」と弁明したのです。しかし、参謀は「追って敵罰に処する」とか「覚悟しておれ」とかの言葉ばかりを何度も繰り返して言っていました。

第一三二師団は、私の分隊の無線機よりも性能の良い「二号乙無線機」を保有していました。この無線機は、二七〇キロ離れた漢口の軍司令部との間で通信できる能力があったので、同日に現地でも玉音放送を聴いていないとは不可思議なことでした。

その日の午後五時近くになって、第一三二師団に派遣されている軍通信の酒井軍曹から電話があり、「お前、今日高橋参謀にえらく怒られたろう」と言われ、私が「そちらには、玉音放送を受信せよ、という連絡が漢口から来っていないのか？」と尋ねると「有線電話が通じなかった。また、軍司令部とは無線も通じなかったのです。そのような連絡は聞いていなかった」と返事してきました。「実は、昨日に漢口から玉音放送を聴くように指令があったんだ」と私は説明したのです。

第一三二師団は玉音放送があることを全く知らなかったようで、高橋参謀はそのことに気がつかずに、私が勝手な行動をしたと勘繰って怒鳴りつけたようでした。酒井軍曹からは、電話で「高橋参謀は、荒井に

くれぐれも謝っておいてくれ、と言われた」と伝えてきました。

二、三日後に漢口の合同通信所から電話があり、「原隊に戻る必要はなく、近くの上級司令部に出掛けその部隊に編入して復員せよ」と連絡されました。勝手に復員せよ、と言う意味ですね。どういう理由か分かりませんが、近くの沙市にいた独立歩兵第五旅団（悟兵团）の通信隊長の川原中尉から電話があり、「我々の部隊に編入して一緒に復員しないか」と誘われました。悟兵团には軍通信隊が派遣されていなかったため、軍司令部と直接通信できる我々が編入すれば復員する際には何かと便利ではないか、と考えたようでした。

しかし、荒井分隊の隊員五人は漢口にいた電信第二十八連隊と合流して復員する希望が強かったのです。知らない歩兵部隊と合流するよりは、相模原から出発した同じ連隊の仲間と一緒に復員したかったでしょう。このため、川島中尉の申し出を断ることにしました。

この頃には、当陽にいた第二三師団が天門に移動するため沙洋鎮に到着したので、追従して天門に移動し、ここで武装解除となりました。武装解除する時に、中国兵が小さな無線機を使っているのを見ることがありました。操作していたのは少尉クラスの中国将校でした。通訳に聞いてみると、中国軍では兵隊、下士官は無線機をさわる事ができなかったようでした。中国軍では、下級兵士が無線機を扱える程の能力がないように思われました。優秀な三号甲無線機を渡しても、中国兵は使うことができないだろうと考えました。それで、我々が大切に使用してきた無線機を古井戸を見つけて投下し、中国軍に渡さないように処分しました。後から、日本兵の数に比べて無線機の数が少ない、と兵器の引き渡しの際に疑われるのではないかと考えました。この件がばれるのではないかと心配を続けていまして、この心配は中国を出帆するまで続きました。

天門には一カ月位いて、漢口に集結し、漢口には昭

和二十一年六月頃までいました。南京を経由して六月中旬に上海を出発し、二十一年六月末に浦賀に復員してきました。上陸して復員局を出ると、ヤミ煙草やヤミ食事を売る物売りがいっぱいでした。アメリカ兵にぶら下がっている日本女性を見て「日本はもうこんな国になってしまったのか」と感じましたが、それ以外に復員の感慨はあまりありませんでした。

当時、実家は横浜市子安にあり、電車で二時間もあれば浦賀からは到着することができ、遠くに帰る人達に比べて気分的に楽でした。実家は戦災にもあわず、残っていました。召集前に勤めていた会社は厚生年金を支払ってくれていたもので、退職届けを出して新しい仕事を探すことになりました。私は気に食わなかったのですが、駐留軍の給料が相場の倍であったので、そこに十三年間勤めました。

## 中支軍の戦闘師団

### 幸兵団の一員として

愛知県 吉田 新一

昭和十二（一九三七）年八月十四日、支那事変勃発、毎日のように村には召集が来ました。昭和十六年十二月八日、大東亜戦争に突入、翌年十月十四日臨時召集を受けて名古屋中部十三部隊第二中隊神隊に入隊。時に二十八歳、初年兵で苦勞しました。

早朝五時に出発して東山より守山、小幡と汗を流して演習夕方五時に帰隊。検閲が終わる二日間帰宅休養の後、十二月十七日機密裏に中支方面に出征。真夜中機密裏に出発したにもかかわらず、名古屋駅には親戚衆が多数見送りに来ていました。どうして機密が洩れるのでしょうか、不思議です。

十二月十八日宇品港を出発、約十時間後に朝鮮釜山港に上陸。途中海は波高く、殆どの者が船酔いして食